

棹

太



老男  
しげき面

第  
百  
四  
號

行發社棹太京東

チカラミ に 腸胃

東京市日本橋區酒町二ノ十  
 新潮製菓株式會社  
 電話茅場町三八一三番  
 廣告東京七〇一〇八番

幸 松

すき焼

和洋御料理

淺草公園 (千束二ノ三四)

牛鍋本店

電話根岸 (87) 〇三八〇番  
 二〇〇〇番

風流・金ぶら・茶漬

【美地句】

去月屋

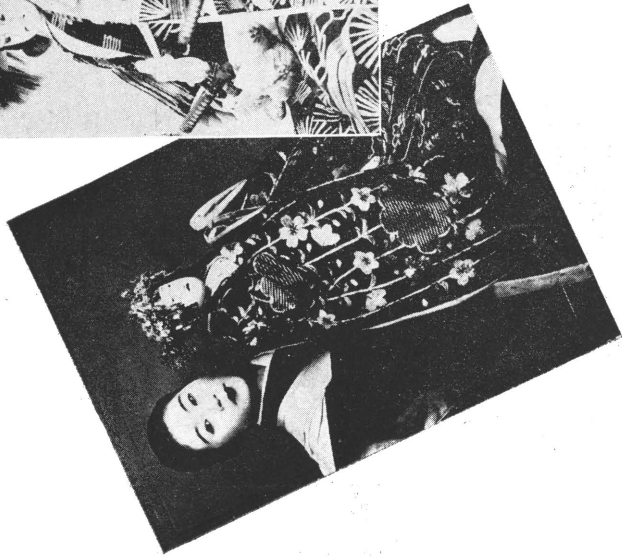
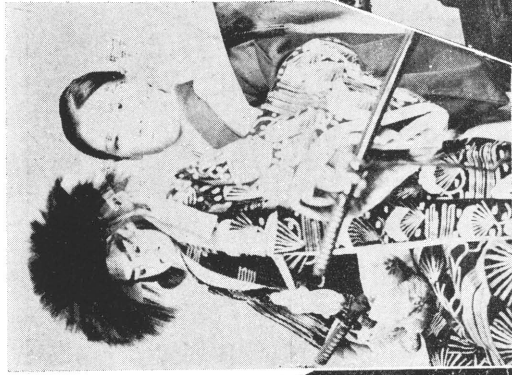
新橋二ノ八  
 電銀二〇八

# 會賀祝の下門助之道澤野



氏巽上井・氏鳳喜本藤・師助之道澤野・氏旭川及・氏口五田中

樂文女乙の導指師造門竹桐



(子美貴竹桐) 姫重八 (子梅竹桐) 丸王松 (子政竹桐) 岡 政



太 棹 第四百四號目次

大樂座	東京引越興行藝評	是澤九似	(二)
實 事	譚	中野三允	(一〇)
ラヂオ	淨曲漫評	金 王 丸	(四)
名人	豊澤松太郎師を偲ぶ(四)	川端柳蛙	(七)
第卅回	東都五十義會成績表		(三)
對 話		新川二八樓	(三)
太 棹 社 彙 報			(四)
當 座 帳			
編 輯 後 記		芳 河 士 記	
表 紙・カ ッ ト		宮尾しげを	

# 大阪文樂座東京引越興行藝評

是 澤 九 似

## 竹本大隅太夫と相三味線豊澤廣助

大隅の淨瑠璃は近來更らに重厚の味を加へて大家の風格を具へて來た、素人聴きには眩惑されるやうな派手な處はないが、一步一步に踏みかためてゆく底力の強さと、押のある聲量の豊かさは天下一品のお家藝で、雄大にして強靱な語り口は未來の大成を窺はしめるものがある、道八の相三味線當時は藝が何となく縮み過ぎる思ひがあつて、聴きながら届かぬ聲を氣の毒との感じがあつたが、不思議なもので、廣助が相三味線になつてからは、あの癖が段々となくなつて、希望に燃えたつ内容が具はつて、淨瑠璃に自信がつき明朗さを感じて來たのは、本人の努力も然ることながら、廣助の心づかひも察するに餘ある、今度の大隅記夕顔棚は近來にない出色のもので、あの聲で東風の語り物としての音遣ひも出て居り、久しぶりに昔風のこせつかぬ淨瑠璃を聴かれたのは何よりであつた、近頃の太夫は兎角藝が理知的になり、神經質に陥つ

て居る傾きがある、そして古典としての深みが次第に消えて肩の凝る淨瑠璃ばかりである内に、單り大隅のみが藝の線が大きく、幼稚な處もあるが眞面目さが藝風に漂ふて居る、之が大隅の持ち味であり、古典の匂ひである、大隅の個性がのんびりした裏にあの淨瑠璃が育つて來た様な氣持ちがする。現代離れのした純情さの中に自然に育つ野花の姿で、複雑性の深まらぬ美しさと匂ひがある、先年ある雑誌で、その當時の三味線であつた、道八氏に大隅を大器晩成主義で薰陶してほしいものだと言つて置いたが、それは名人團平の藝を知り、先代大隅の藝の浸みこんで居て離れぬ道八は、やゝともすると大隅を、先代大隅式の淨瑠璃に強ひてひつぱり込むやうな處があり過ぎ、まだ咲きそめぬ草花の手入れの過ぎる憾がありしゆゑ、其のはき違ひを云ふたのであつた、今度高座で廣助が大隅を弾くのを聴いて、流石に廣助は大隅の相三味線としては最適任者であることを感じると共に藝は世間離れのした程の皮肉も入らず、又力量ばかりではなく、頭で弾

き、心で弾くべきことが肝要で、三味線が締めつけて弾くべき藝風と、太夫の個性を壊さぬやうに教養して往くべき藝風とあるが、大隅は蓋し後の方に屬すべき太夫で、幅のある大隅の語り風には、餘り皮肉でなく、貫祿のある廣助の三味線が調和がよく備うて、今や天東の大型に成らんとする内容を待つこせつかぬ大隅の淨瑠璃が生れて来るのではないかと思はれる處が出て來た、この意味で廣助の女房役としての相三味線は、まさに満點であることをも賞讃せんとする次第である。

### 豊竹駒太夫と鶴澤清二郎

駒太夫は生來の藝才能のある人で、まだうら若い小富太夫の當時から、既に俊才を認められ、一般から期待を持たれた人で、就中眞世話物には、或る一種の甘い、軽い魅力の湛えを感じられる、これがこの人の持ち味で、自然の匂ひなのである、今度の興行では初日の紙治前半切と、三回の三勝酒屋とを聴いたが、まぐらの腹構へから終りまで、流石に垢ぬけのした語り方で、どこまでも古典主義で、外の太夫のやうに時流に阿ねらず、あくまでも毅然として淨瑠璃道の本領を確守して居るところは、寔に見上げたものだ、誰もが眞似られぬ錯び切つた裏に情熱の絢爛な華やかさがあり、獨特の裏ら聲は天下無敵で、つく／＼と感心せずには居られなかつた、別して「酒屋」の方が結構で、更らにアテ氣がなく、この人

の淨瑠璃ならむづの素人が聴いても、意味が鮮明に理解せられる、是非善惡の昔の世想を織りこんで、正邪の葛藤の中に人情をからみつけた節もの故に、餘りに理窟ばつては古典の風格が無くなら過ぎる、語る太夫が苦心慘憺するのが、表情ばかりか、態度にも、顔面にも、呼吸にまで瞭はすことは、決して褒むべきことではない、斯道の名人、上手といはれた故人を聴いた感想から考へても、苦心の呼吸が顔や形に表はれぬ所に淨瑠璃としての風韻があり、貫祿があるので、この點から云へば、文樂座の古靱太夫の語り口と、駒太夫の語り口とは正反對で、その善惡は別として、時代物でも、世話物でも重くるしい感じがなく、肩のこらぬ處に駒太夫の藝味を喜ぶと共に、語る節付けと、詞の技工が駒太夫獨有の自然的の描寫を賞讃せずには居られぬ。

清二郎は割に弾ける筋の人だが、どことなしに藝の若さを感じられるのは年齢柄かと思はれた、三味線は掻き呟らす道具でなく、腹で弾き、腰で弾き、心で殺ろして弾くことを知らねばならぬ、殊更に淨瑠璃節の三絃は、死活の餘韻と、背景まで弾かねばならぬ、太夫と総合的になつて不離不即、呀呷の間でつなぎの呼吸が肝心だ、いくら達者に弾いても年齢が若くては貫祿が乏しく柔らか味がない、精々良い太夫を弾かしてもらつて修行を積むより外ない、駒太夫のやうな洗練された藝を弾くことは、出世の第一關門であることを忘れてはならぬ。

## 古 靱 太 夫

古靱の淨瑠璃はたしかに間が延び過ぎて居る、寧ろ本人は好むで延ばして語つて居る、古靱は古典淨瑠璃節研究家としては斯界の第一人者である、太夫としての古典の研究は最も肝要なことで、淨瑠璃節として古典の風格を離れては何にもならぬ、殊更に、古格、故實、語り物の役場、東西の區分と音遣ひと風格、間拍子、等の要素を探究することは、實演上にも大切なことである、さりとて古典研究家が抱負そのまゝの實演は甚だ危険至極である、語り物は實演以前に、まづ客觀的の立場で、果して自身の個性と聲柄に適するや否やを慎重に吟味し、その作意と、節付けが自己の持ち味の藝風に合致するかをも、充分に選擇すべきである、平素研究した希望をそのまゝに實演しても、その語り物が、自身の個性と、持ち前の藝格にびつたりと染まぬ限りは、折角の苦心も却て聽衆に厭がれることになる、今度の興行で大隈記尼ヶ崎を聽いたが、この十段目の切は古靱の折紙付きの一つで、先代鶴澤清六（三代目）の相三味線時代から聽き慣れ、耳馴れて居る、古靱の太十は東京では餘り度々の事故に本人としては氣の進まぬ處もありしやと相像せらるゝが、松竹の營業方針上で已むなき關係であるものと思はるゝ、果して聽衆は期待に反して意外の不評を招いたのは、洵に氣の毒な次第である、この氣持ちが本人にもあつたものと推測され、何となく語り

づらい氣分があり／＼視へ、處々語り風を變へて苦心の程も察せられた、この東物の麓太夫役場が果して古靱に適した語り物か、否かは別として、過去に遡つて氏の語り風の變化に就て、この批評を綴つて見ることにした。

名人豊澤團平死後、相三味線にこまつた先代の大隅太夫は鶴澤叶（後の三代清六）を見立て、自分の相三味線にした、當時の大隅の實力は淨瑠璃界で横綱の存在で、この太夫を弾くことによつて、自然に實力の出來た清六は、其後今の古靱を弾くことになつた、古靱は昔はつばめ太夫といふて、素と先代法善寺竹本津太夫門下の愛弟子の一人で、頗る器用上品な語り口で其頃の俊才として誰もが囑望しては居たものゝ、聲量が乏しく、腹力も比較的に薄く、藝風から謂へば、西風の四段目語りに適した聲柄の人で、到底、大時代の三段目切などの語れさうな底力のある人とは思はれなかつたのである。

相三味になつた清六は、多年先代大隅太夫を弾いて自信のある藝力で、古靱を根がきり、腕がきり叩きこんだ猛稽古のため、いつしか聲巾も出來、地力も付き、腹力が薄くても呼吸の力で何でも堂々と語り得る太夫となつたのである、當時清六が高座で古靱が器用が出るのを押へつけ、自由に語らせず、締めつけ／＼弾いて居たことが今猶耳について居る、やつぱり如何なる天才でもいゝ加減に語る、自己満足の藝道には進歩はあられぬ、三代目清六が締め付けて弾いて居た時代の古靱は、誰もが未來の紋下であり、天才であると認める斗



りか、玄人仲間でさへその成功を羨んだ程である、それは古  
鞞自身が誰よりも藝道に凝つて眞面目であり、終始一貫せる  
意力によるもので、下地は器用な人でも、肝心の聲量が乏し  
く、腹力が薄い古鞞としては、人幾倍の苦勞があり努力の結  
晶であると云ひながら、全く清六の薰陶による賜である、か  
ゝること、古鞞の修行が餘りにも理詰であつた關係から、  
語る辭がいつしかと大きく明朗に／＼と喰ひ込んでゆき、力  
量専念に凝つたゝめに、淨瑠璃そのものは、自分の師匠先代  
津太夫の風格を離れて、寧ろ先代大隅太夫風の實力主義の眞  
諦を迎へる結果に變じて來たのである。

(イ)先代清六を相三味線とした時代の

古鞞の藝風

古今無双の技倆の備はる名人豊澤團平は、淨瑠璃節の段々  
と壞れて兎角太夫が向ふ受けのアテ藝を嬉ぶことを歎き、つ  
とめて小伎を捨て、大乘的氣持を執るべく、先代大隅太夫  
を大器晩成主義で鍛ひ上げ、斯界の模範として其實力を天  
下の聽衆に示したのである、大隅の大器としての藝格は自身  
の持ち前とは云へ、全く團平の多年の抱負の實現で、大隅  
は恰も團平の代理者の立場にあつて大乘的淨瑠璃節の眞諦を  
教へた巨匠であつた、この大隅門下に故竹本春子太夫と、今  
の竹本土佐太夫の双壁が光つて居つたが、兩氏は師の藝風に  
倚らず遂に自身の個性に一貫して大成したが、寧ろ大隅の藝  
風はその相三味線であつた清六によつて傳へられて、大隅の

精神的氣魄と卓絶した藝風のある程度は確に清六がうけ繼い  
て居たものと思ふ處がある、この氣魄と、藝風を以て、古鞞  
を薰陶し養成したので、清六生存中の古鞞の淨瑠璃は一段を  
通じて氣魄が漲ぎり、熱氣が迸つて、恰も、線の小さい、型  
の小さい團平と、大隅を偲ばす正氣が漂ひ、當時の古鞞は懸  
命であり、清六も思ふ通りに弾き切つて、太夫と三絃が、鎬  
ぎを削り、或は離れ、或は就き、いつも高座で火花の散る思  
ひがあつて、聽衆をして思はず呼吸を詰めさせた眞劍味が溢  
ふれて居つた。

(ロ)今の清六(四代)を相三味線とした

古鞞の藝風の變化

今の鶴澤清六は若手の三絃弾きの内では風格の備はつて居  
る人で、高座の態度といひ、力量といひ、音色といひ、貫祿  
といひ先づ以て文樂座元老の二三人を除いて若手の第一人者  
である、古鞞が自分の相三味線として清六を擁護し引立て、  
來たのも尤もの次第である、現在文樂座の太夫中で、一番彈  
きに／＼と、骨の折れる三味線殺しの太夫は古鞞で、容易な  
腕で弾き切れるものではない、三代清六に磨き上げられて底  
しれぬ技量があり、氣魄と、ねばり強さがあり、しかも研究  
家のことゝて希望の豊富さと、穿鑿に燃えて淨瑠璃そのもの  
に陶酔して、捕はれ過ぎる結果は、玄人としての立場よりも  
趣味的方面に餘りとは深入り過ぎることゝとなり、知らず知  
らずの内に三味線殺しの藝風に變化し、聽衆からは是非の批評

をうくるに至つたのである、三代清六は自分の力量が古靱以上であつたために、古靱の藝を引き締めくめて疊みこましたが、四代清六は古靱の藝を擁護することのみ専念して、自分は先きへ廻つて弾いて古靱に勝手氣儘に語らず習慣をつけ、所謂三味線が叙知的になり過ぎる結果、古靱も之をよいことにして、唯さへ足の永い癖のある藝を一層樂しむことになり、昔の藝とは非常に變化を生じて來たのである。

### (一) 鶴澤友治郎に弾かした時の古靱太夫

今の清六が病氣のためか、先年隠退した鶴澤友治郎が一時代役をつとめて古靱を弾いたことがあつた、文樂座の三絃弾きの大看板、實力、貫祿兼備せる友治郎が古靱の相三味線として藝風至難の稱ある古靱を、いかに取り扱ひ、弾きこなしてゆくかは當時として聴き漏らされぬ期待の一つであつた。

友治郎の藝格は文樂座三絃中の古參で、先代野澤吉兵衛没後唯一の元老であり藝風としても他の追隨をゆるさぬ貫祿があり、人の苦しむ難處を樂に弾きこなす實力の冴えた藝で、殺活自在の妙技を會得した友治郎、これに對する古靱の語り風は生氣が溢れ、緊張味が加はり、間足もはやく、弛みもなく至極興味を窺はしめるものがあり、古靱の淨瑠璃も或る程度藝の復活の出來得るものと秘かに期待して居たに、何の原因か謎を残して別れてしまつたのは返す／＼も遺憾な事であつた。もと／＼文樂派の藝風に育てられ、之に染つて大成した友治郎の藝風と、團平派の藝風に馴染だ清六に陶冶せられた

古靱の藝風とは、お互に物足りなさを感じる餘り一致融合が出來ぬための結果とも想像さるゝが、藝は技能ばかりでなく己の心に發するお互の了解と親しみが肝要で、「惚れた慾眼で菊面も靨」この氣持で互讓精神があればこそと、つく／＼感じるのである、故團平と、故大隅の兩巨人、いつも渾然たる藝の融和によつて成果を結んだのを思へばである。

### (二) 鶴澤重造を相三味線としての古靱

#### 最近の藝風

重造は若いに似合ぬ落付のあるのんびりした藝で、音色も柔らかな三味線である、嘗て駒太夫を弾いて居た時にあの人藝が耳に残つて居たが、古靱を弾くことによつて、めつきり腕をあげた、その進歩ぶりにしみ／＼感服した、しかし三絃は年齢がものを云ふ道具のこと故にどこにか若い處があつて貫祿の足らぬのは争はれぬものだ。重造を相三味としての古靱は今までの誰よりも氣樂さうに語つて居り、間と足どりは自分の好き自由に伸縮して語つて居る。今度の太十も先代(三代)清六の當時と比較すると餘程の變りやうであり、古靱獨有の藝風のおそろしい氣魄は段々と影をひそめたことは否む譯にはゆかぬ、年を経るにつれ藝風も次第に圓熟し、語り風も自然と變化し、さまざまの體験からいろ／＼の工夫も取り入れられて、語る情味が自分の持つ個性にびつたりと合流すれば、即ち其人の自然の淨瑠璃で、いかなる天才でもこの道程を通過せねば妙境眞諦は得られぬのである、露骨の處が

太十などは他の太夫に任して、古靱自身は個性に合ふた語り物を澤山聴かしてほしいのである、時勢に苴み藝に應じて淨瑠璃も自衛の途を講ずるための喘ぎのあるのは當然なれど、古典の大變改は容易のことではなく、單なる工夫や技巧では及びも付かず、自分の個性を撓めたり、殺したりして努力しても追付くものでない、要するに新工夫の技巧は自己の矛盾であり古典の破壊であることを考へねばならぬ、そして淨瑠璃節は餘りにも明朗主義の露出を厭ふ、て漂渺とした山櫻に霞のかゝる風情と餘韻がほしいものだと思ふ、之が古典の持ち味であり風格である、明朗過ぎると古典としての風韻には缺げるところがあると思ふ、昔の作で筋の通らぬ不自然のものを自然に語れと云ふことは古靱氏へ對して無理な註文かも知れぬが、之をついめて云へば自分の個性に合ふものを語れと云ふ結果になる譯で、今一つは生きた藝術ゆゑに、藝術的の柔かみがいくらか枯渴して居りはしないかと思ふのである。

## 鶴 澤 重 造

綱造病氣のためあの摺み處のない日向島の難場を代役として重造が弾くのを聴き、餘りとは氣の毒の思ひがした、淨瑠璃として錆び切つた日向島は、貫祿で語り、貫祿で弾くべきもので古參の三絃弾きも澤山にあるのに紋下の相三味線の代役をさせ、まだ其上に古靱の鮎屋までも弾くべき本役をひかへての出演は、文樂座として餘りにも人なきが如く、まして

や重造は日向島としては藝慣れぬため呼吸の合はぬ勝ちで、語る津太夫も、弾く重造も、之を聴く大衆も實に不愉快極まることで、恰も東京の聽客を馬鹿扱ひにし見くびり過ぎた仕打の上に、藝道から謂ふても返すくも遺憾千萬であつた。重造が自分の道を歩んでゆく姿の熱心さとけなげさに同情もし頼母しくも思ふと共に、相當な未來を期待するものである、自分の境遇に甘んじて勉強することが第一義で、外面の効果に捕はれてはならぬ。

## 竹本津太夫と相三味線鶴澤綱造

古典の與へる藝術趣味は情緒的で、文樂座の人形淨瑠璃の如きは古典として情緒的の代表された藝術である、とりわけ津太夫の藝は圓熟して妙境に達し古典の滋味と枯淡さが瞭はれて、立派な藝術の眞諦を得たものと感服するのである。津太夫は年齢を重ねて往くほどますます重厚さが増して來て流石に紋下の貫祿が具備して來た。あの人の淨瑠璃が所謂三味道で、節に節あり、節に節なしで、語れ、語るなどの境地である、あの悪聲で技巧の慾望が片影だにもなく、それに謂ひしれぬ處に人間味があふれて居る、今度の興行では津太夫の語り物は他の太夫を壓して好評を博したばかりか、客筋一般の人氣を獨りで背負ふた形であつた。津太夫と自分との交遊は餘り深くはないが、文太夫時代からの藝風はいつも聽いて居る、七八年前に明治座の引越興行のときに出合ふて、

忠臣藏九段目の人形遣ひのことに、近年は大序から人形遣ひが肩衣「裱」をつけて出遣ひをする習慣が出来て、やゝともすれば、藝が派手になりたり、人形に落付が缺けて来た、せめて今度の九段目だけは昔の儘に「黒んぼ」で遣ふてほしいと話したら、津太夫も非常に同感であつた。たしか其翌年であつたと記憶するが、妹香山三段目切懸合ひに大判事の「詞」に就いて先代法善寺のことを思ひ出して、自分の希望の一端を某氏に通じて進言したことがあつたが、其後も二三回は出合ふて居るが、打解けて話したことはない、しかし文樂座の紋下といふ代表者であり、大世帯の統率者として全員を背負ふて立つて居らるゝ重責者として毎時敬意を拂つて居るのである。

今度の興行で、沼津と日向島を聞いたが、沼津は折紙つきの出し物ゆゑ悪からう筈はなけれど、これまでに耳に鮪の出る程聽いて居る關係から又かと思ふて聽くうちに、思はず知らずあの自然の語り口に魅惑せられて、呼吸もつかぬ面白さ、津太夫が平作か、平作が津太夫か、あの悪聲でお米のさはりの情味、微に入り細に渡る人情の絡みの自然さ、寔に至妙の藝格、老齡に入るほど冴える枯淡な餘韻、淨瑠璃の醜翻味に酔はされた、津太夫の希望か、三味線綱造の藝の復活か、平作の切腹してからの「メリヤス」胡弓を遠音に聽かし三味線の音を殺して、太夫に離れて背景の餘情を味はし、千本松原の虫の聲、松風の音鳴咽の中に、親子の名乗り義理の

しがらみ、死別恩愛の繼を絶つるの想を浮べたは綱造氏のお手柄と推賞する次第である。いつの頃から變つたものか「メリヤス」で賣めて切腹の垂れ間を助けんとした技巧のために、あたら餘韻をなくした憾みがあつたが、津太夫の力量と綱造の苦心によつて、古典氣分の復活出来たことは斯道のために嬉しい極みである。

日向島は先代大隅の獨參湯で、最近津太夫の奮起によつて聽かれるのは、何よりのことである、舊年の頃先代大隅の日向島が餘りにも面白く幾日も續けて聽きに往つたが、三味線は三代目の團平で、花菱屋は大島太夫で、三味線は今の廣助當時の竹三郎であつた。この花菱屋が素敵滅法の出来で聽衆をアツと唸らせたものであつた。これを思へば今の若い太夫連中に比較して、昔の太夫は藝に凝つて恐ろしい力量のあつたものだ、しみじみと考へさせられる。其後素人の日向島語りの高木蟻洞氏の上品な語り風も耳に残つて離れぬ思ひがする。今の太夫では日向島は津太夫に敵まつた語りもので期待した甲斐もなく、不幸綱造の急病で重造代役なりしたために遺憾な處もあつたが、實力の備はる太夫のことゝて景清の述懐も無難の出来で、佐次太夫も手に入り過ぎる程の面白さ、先代の大隅太夫は豪快の氣魄と卓越した力量で語り、津太夫はどこまでも枯淡と錆びた貫祿で聽かして居る、要するに津太夫の藝格は世間離れのした、超然脱然たる處に實價が存するので、こゝに津太夫としての淨瑠璃の妙境があり、藝道の眞價値があり、津太夫の天分があるので、あの立派な堂々とした自然の語り風は、浮世離れた津太夫の個性がいつとはなしに練磨せられて、自然に津太夫の藝術を生んだのである。

## 總評と希望

古靱の氣魄の藝に對して津太夫は枯淡の藝であり、駒太夫は絢爛の裏に錆び切る處があり、大隅は雄大豪快の藝である。津太夫は自然を透寫する程の器用な人でなく、自己の持つ個性の味を自然に表現することによつて成功した藝格であり、古靱は智性的の藝術家で、研究の中に自己の求める淨瑠璃の自然を探究して表現せんとする熱情家である。自の技倆と、趣味に陶醉するために却て自から迷ひ自から失敗を演ずるのである、先代大隅の如き豪快な線の太さがないので聲量に無理がきかず、思案に凝り過ぎて却て乾燥した藝術を生むのである。外の太夫は未知數で、唯織太夫の前途に聊か囑望する處がある。斯の道は素人も天狗であるが、玄人も随分天狗である、今の若い太夫は再思參考して舊の名人や、現代の上手の先輩の語り風を充分吟味し研究して自分の足跡を顧みると同時に、將來に資する心がけが肝要だ。今回の興行を觀しゆき、聴きに往く幾萬人の聴衆の内で淨瑠璃を知つて居るものだけに聴いてもらつて、其人等の慰安になればよいと云ふ心がけなれば夫れまで、あるが、それでは文樂座東京引越興行の使命は果せて居らぬのである、他の興行物に比較して淨瑠璃は現代の時勢に合はぬと云ふ議論もあるが、要するに藝は正氣が必要である、人間の生活のあるところには必ず娛樂があり、又眞實もある。文樂専門家はこの精神を持つて猛然と蹶ち上り世間の心理を掴むことだ、一松竹の營業に甘んじて聴衆に頭を下げて切符を賣りつける算段は自身の生活上には大切かも知れぬが、大衆に喚びかけて是非聴くべしとの勇猛心によつて淨瑠璃の地盤復活に奮闘せねばならぬ。事變の壓力が世間を萎縮させると云ふ不平の嘯きもあるが、一般に興行物は近年稀なる盛況である、淨瑠璃は松竹から恰も厄介物

扱ひにせらるゝとの苦情も聴くが、この苦情はいつの時代でもある悲惨側の歎聲で、それを乗り越へて捨身で大衆にぶつかつて往くべきだ、過去二百年に涉つて社會の各層の家庭に浸潤して、昔は之を習ふ素人は金に糸目をつけぬことを自慢として居つたといふ一種の迷信的な打込方は最早過去の遺物で、現今の社會は情けない程眞の藝術に對する理解が狭くて薄くなつて居る、或る意味で淨瑠璃は世間の大部分の家庭から閉め出しをくつて居る、この苦境を乗り切る手段は、研究と努力で捨身で往くより策はない。事變以來日本精神が説かれ、東洋精神が説かれ、古典の復活が説かれ、國策に沿ふべき藝術が説かれて居るのに、文樂の太夫、三味線弾きはこの際に文樂の古典復活に關心を持たれぬことは何たることか。先づ自己の藝術を知り、自己の藝術に生きることだ、今の文樂の諸先輩はこの勇氣に缺け、努力もせず唯自分の語る持場を濟ませば、すぐにどん／＼歸つてしまふ、これでは後輩の藝道の上達は望まれぬ、故人團平は藝道にかけては非常な潔癖家で、自分の意見は一步も退かぬほどの氣概があり、平素若い太夫や、三味線弾きの指導に就ては根強い情熱のあつたことは誰もが知る處である。藝道に達した名人の心懸けは見上たもので、この氣魄があればこそ、あの藝術を残したのである。今の若い連中は研究もせず、ろく／＼語れもせぬに情氣と天狗心が胸中に充滿して鼻持ちもならぬ。藝格を捨てずに守り通してこれを傳へる太夫と三味線弾きがなくては滅びるより外はない、特に希望することは、津太夫、古靱太夫、其他の三絃の老連中は、後進者を徹底的に鍛鍊さすと云ふ重大責任のあることを忘れずに指導することである、又後進者は絶對的に先輩に服従して先輩の鐵鞭を甘受する覺悟が最も大切である。

昭和十四年四月九日脱稿



實<sup>じつ</sup>

事<sup>じ</sup>

譚<sup>ものがたり</sup>

中野三九紹介

## おしゆん傳兵衛の實説

附 猿廻し與次郎の事

西京、鳥部山日蓮宗本壽寺の境内に在る古墳を、古くよりおしゆん傳兵衛情死の墳墓なりといひ傳へたり。

此の墓は、凡そ三尺六七寸の高さにて、表面に『妙秋信女——宗秋信士』と合刻せり。何者の好事者か、いつの頃よりか縁遠き男女は此の墓に祈願すれば靈驗利益ありと言ひ傳へたるにより、今にいたり尊信するもの多しといへども、此の墓は決しておしゆん傳兵衛を埋葬せるものにあらず。

おしゆん傳兵衛の實傳は、世絶えてこれを知る者無かりしが、西京の某氏が、享保七年より寶曆二年まで見聞したる事を記せる日誌あり、其の書中、元文三年十一月の條に曰く、『十六日の朝、聖護院杜の内に、年のころ二十二三歳ばかり

の男と、十九か二十歳ばかりの女と心中して首を縊り死たるを見に行きたり、男は釜座姉小路下る吳服屋、井筒屋傳兵衛といふもの、女は川端の四條上る先斗町、近江屋金七抱へのおやまお俊といふ者なり。此傳兵衛は父親なく、早く世帯をもち、母と二人暮しにて、ふと此のお俊になじみたりしが、内へ入る事もならず、縁切る事もできず、受出すには金はなし、ふとした事から心中したるなり、此のお俊の親は東堀川下立賣下る路地の内(今も此の地をお俊長屋といふ)……傳兵衛は法華宗にて要法寺の檀家なり、お俊の親方と相談して死骸をもらひ、要法寺へ二人とも一所に埋めたるなり。傳兵衛は一人の母を見すて、おやまと心中して親に苦勞をかける大不幸ものなり、又、猿廻し佐吉は一人の母を大切にしておやより御褒美をもらひたるは、雲泥の違ひなり云々」とあり、是れ、おしゆん傳兵衛の實説なり。

然るに、此の事を狂言に作り「近頃河原達引」と名け興行するにあたり、右の文中に見えたる佐吉を與四郎と改めたる

なり。且つ「河原達引」と名けたるは、右の日記の同月十三日の條に曰く、徳大寺様の御家來、中村主水と下部しもべ晋吉と、久我様の御家來、秦野伊織といふ三人が、四條東の芝居顔見世見物に行きて、所司代様の下部五人と喧嘩をしかけ、初夜ごろ河原へ出て、所司代様の下部常五郎といふ者が、晋吉のあたまを石でこづきたるより、中村主人がきかぬといふて刀をぬき、常五郎を切り斃す、又、伊織といふ人も刀を抜いてあばれ、又、定造といふ者を切り、所司代様の下部二人殺され、二人は疵つけられて、皆にげ行きたり。後で所司代様より、久我様、徳大寺様へ掛合となり、中村も秦野も逐電して逃げたれども、秦野は伏見でとられ、中村は今に知れず、秦野と晋吉は、東町奉行所へ引渡されたり云々。

又、同書に、翌元文四年六月の條に、秦野中村は遠島、晋吉は中追放、所司代の間源助、松之助は所拂ひとなれりと記せり。按ずるに、此の喧嘩をおしゆんが事より起りたるとし、其の人殺しも傳兵衛に作りて、お俊と傳兵衛は情死せりとなし、其のころ名高かりし孝子佐吉に與四郎の名を借用して、おしゆんが兄に作り、此の三件を附會して「近頃河原達引」と題せるものなるべし。

此の狂言の作者は、近松半二なり。此の事は霜月の末なるに、顔見世は霜月廿八日打しまひたり、其の日、直ぐに布袋屋座にておしゆん傳兵衛「近頃河原達引」竹本河内太夫相動め候といへる看板に、口上を添へて出せるよし新淨瑠璃外題

鏡に記せり)

さて、彼の西京鳥部山本壽寺に現存する妙秋信女、宗秋信士の墓を世上にて専らおしゆん傳兵衛の墓なりと言ひ傳ふるを按ずるに、彼の淨瑠璃「近頃河原達引」猿廻しの段に鳥部山心中の唱歌あるゆえに、本壽寺にある墓こそおしゆん傳兵衛の淨瑠璃にある心中の墓なりといふべきを、いつとなく誤り傳へて、おしゆん傳兵衛を埋葬したる墳墓なりと思ひ違へしものなるべし。

抑々、此の本壽寺にある墓の由來を按ずるに、鳥部山心中の唱歌は、近松左衛門の作なること世人の遍く知るところなり。此の情死をなせる男女は、お染半九郎といふものにて、鳥部山心中の唱歌は即ち此の事を作れるものなり。お染半九郎の事は「見聞覺知」といふ寫本に載するところ實説なるが如し。——其の書に曰く、

『寛永三年九月、兩將軍家（臺徳、大猷二公）御上洛のみぎり、二條御城御普請奉行の附人つげひとに菊地半九郎とて、年のころ二十二三ばかりなる優男あまこ、容顏美麗の若もの、當春のころより頭人かぶとんと共に京都に來り、普請の勤役中、堀川姉小路邊に旅宿して、都めづらしさに折にふれ祇園に遊行し、圖らずも祇園町の茶店若松に憩ひたりしが、此の店に年のころ十八九ばかりの娘お染といへるは、其の容貌は月とも花ともたとへん方なき都風俗の美婦なるが、茶を汲みて半九郎前に差出すを見て、半九郎は唯だ茫然と見とれわたるに、お染も綻ぶ花の

色香にさそはれ、半九郎が風俗を憎からず想ひをかけしよりいつかわりなき中とはなりぬ。かくて半九郎はお染が情に遂ひほだされて、勤めさへ浮の空にて、日となく、夜となく若松にのみ遊びくらすうち、光陰白駒の足より早く、九月下旬になりければ、將軍家にも江戸表へ飯城の旨を仰せ出され、お供の諸士は喜びて旅の支度を整へる中に、半九郎はお染と別るゝことを歎けど、詮方なければお染に別れの暇を告ぐれば、お染もひたすら悲しみて、假令一日半月なりとも君に別れて我のみひとに何樂しみにならへんや、東の旅へともどもに伴ひてよと泣きかこてば、半九郎もその理にせめられ、生別れて歎かんより、一所に死んで未來にては同じ蓮の臺にうまれ夫婦とならんと覺悟を極め、九月二十九日の夜、對の衣装を着かざりて鳥部山へところざし、お染の胸のあたりを貫ぬき、半九郎も咽喉を突破りしが、死きれねば谷間の清水の中に陥り、苦痛におよぶ其の折から、清水寺へ朝詣の往來人が見とがめて、是は情死か不心やと介抱するうち、半九郎も遂に息を引きとりしを、其のころ本壽寺の住僧某が、二人の横死を憐みて寺中に埋め墓をたて、宗秋信士、妙秋信女と戒名をつけ、後世安樂を吊ひしなん云々」とあり。

又、一説には、おそめ半九郎は同胞なるを知らずして深く契り、その後互ひに名乗り合ひてこれを愧ぢ、遂に情死したりといふゆゑに、近松門左衛門が鳥邊山の唱歌にも、同胞なる意をふくみて作れりといへり。然れども此は信すべからざ

るに似たり。

按ずるに、おしゆん傳兵衛の情死は十一月の事なるを以て、淨瑠璃の唱歌のうちに「頃しも霜月十五夜の月はさゆれど胸の闇」とありて、前に引ける日記のごとく、十一月十五日の夜に情死したるに疑ひなし。是等の事を以ても、本壽寺に在るはおしゆん傳兵衛が墓ならずして、お染半九郎が墳墓なるを知るべし。

又「染模様妹背門松」といふ淨瑠璃に、山家屋清兵衛が詞のうちに「お染といふ名は世間にいくらもある、それ鳥邊山の心中がお染半九郎云々」と有り、按ずるに、元祿、寶永のころより安永、天明の頃まで、此の鳥邊山の唱歌は大いに流行したるものと見ゆ。故に「近頃河原達引」の淨瑠璃にも此の唱歌を嵌めたるものなるべし。又、此の淨瑠璃に脚色たる猿廻與次郎は、前にもいへる如く彼の孝子佐吉の事を假用したるなり。佐吉の事は前に引いたる日記の文に「猿廻し佐吉は一人の母を大切に上より御褒美をもらひ云々」とあり、又、西京の某氏の家に、享保十六年より近年にいたるまでの御觸留といふ日記ありて、公文類を遺漏なく纂輯せるもののその中に、此の猿廻し佐吉の褒詞をも載せたり。……左の如し……。

東堀川一條上ル富田町

蠅子屋治三郎借家



此者儀 幼少の砌 父佐共衛に死別し 其の後 母とみ  
 儀眼病を煩ひ 終に盲となり 佐吉儀母の介病怠り無く  
 種々孝道を盡し候處 近年不幸打續き 父の家業古衣渡世  
 相續いたしがたきにより 賤しき業をも厭ひなく 貧苦の  
 中に母養護の爲め 猿廻しの家業を致し 未だ妻をも婚ら  
 ず 貧敷暮し候得共 母に仕ふる事厚く 少しも母の意に  
 背く事なく 其の身は一切美食を喰ふ事なく 母に食物を  
 與ふる事丁寧にして 神佛に供するが如く 又寒暑を厭はず  
 稼ぎに出る事一日も闕事なく 家業の都合により夜遅く歸  
 り 其の身如何程草臥候とも 母の寝ざる前には決而其の  
 身臥候事なく 朝は早く起て母に其の日の食物を與へ 母  
 少しにても氣分悪く候節は何迄も傍を離る事なく 機嫌を問  
 候段 小前の者には難相成孝道別而奇特なる事に候 依之  
 爲御褒美青銅七貫文被下之もの也

元文三年九月廿七日

さて猿廻し佐吉を與次郎と作りかへたる事を按ずるに、其  
 のころ叩の與次郎と異名する物乞ひあり、「音曲類纂」などい  
 ふ古本に載せたる所に據れば、享保の末に叩きの與次  
 郎とて、手に古びたる扇をもち、掌を叩きをかしげなる顔を  
 して淨瑠璃を語り、又は世上の事共に節をつけ、叩きながら

戸毎に立ちて貰ひ歩行し者ありたるより、これを眞似る錢乞  
 の者多くあり、これをおしなべて叩の與次郎の事を擧げたる  
 ところ有り、或る人いひらく、此の佐吉も其節の形をとりて  
 鞭にて地を叩き、猿廻し節を唄ひたるがゆえに、與次郎節の  
 猿廻しが褒美を貰ひしと市中の噂さ高く、本名を言はずして  
 與次郎の猿廻しといひしゆえ、直ちに狂言に其の名を假りて  
 作りたるものなるべし。

作者不明の忠臣藏俳句 三 尤

- 初 段 虫干や御代にならべる星兜
- 二 段 目 待宵や松ヶ枝きるも明日のため
- 三 段 目 鮎だく鯉とおもふた寒見舞
- 四 段 目 夜ざくらや當世風の長羽織
- 五 段 目 鐵砲の獲物さぐるや木下闇
- 六 段 目 鳴ながら賣られて行くやきりくす
- 七 段 目 稻妻や斧見出した縁の下
- 八 段 目 嫁にやる子をさきにして花野原
- 九 段 目 煤掃や此所をせぎつてからせめて
- 十 段 目 ちさくとも男でござんす菖蒲太刀
- 十一 段 目 討入衝突入や足を大槌に數十人
- 十二 段 目 炭部屋雪ふんで本望たりぬ富士詣
- 番 外 泉岳寺雪晴や洗ひあげたる紐の首
- 同 善士切腹死に臨む男やのこして洗ひ鯉

ラヂオ 浄曲漫評 金丸

口 上

毎度ヤツつけない漫評、よくぞ御覽下さいまして難有御禮申上げます。然る處、金丸事、とかく病弱の、殊に今春肺炎といふ重病に罹り、二ヶ月ほど療中の人となりまして、ラヂオのセットが病室にござりませぬ處から、又たもや御無沙汰に相成り、殊に此の三月は、BK新案の管絃樂入り義太夫なんて珍奇、奇怪なるものもあり、その他聴きものとしては、津賀さん事米翁師の五條橋やら、鏡太夫新左衛門の國性爺などもあり、更らに、文學の解剖として、木谷先生や、津太夫、榮三などの談話と賞演、文字太夫と織太夫の『壺坂』などもあつたのですが、遠音に三味線を聴いたばかりで、何れも失敬したものの故に、今回は四月に入つてからの分だけを、例の一筆、かくの通りにござりまする。

東京女義

〔四月九日〕

観音靈驗記

壺坂寺の段

竹本小土佐  
絃 豊澤美佐尾

新聞の説明通り、東京女義界の長老で

あり、古い人であり、絃は愛娘、五反田の太棹藝者。出演の度數や、宣傳を以て見ると、いかにも、AKの局實であるかの感じがある。誠に以て困つたものである。昔しは相當に鳴らした人であり、我等も随分、手を叩きにその高座を打仰いだものであるが、今日、もう實に、眞面

目にこれを聴き、これを評するの忍耐を持たねことになつてしつた。聴き了る壺坂一傳へ聞く壺坂の山の段、それはさすがに、今の若いのに言へないことを言ふ個所もないではないが、さて、局實だの、長老だのとして拜聴させられては叶はぬとまで思はせられた。闇の晩に誰れかにナグラレルかもしれぬ。

文學中堅

〔四月十四日〕

増補生寫朝顔話

宿屋の段

竹本相生太夫  
絃 鶴澤道八  
箏 鶴澤清友

文學若手の中堅である。しかし、および此の人位までは、イヤ此の人位まで進むのは、容易の業ではあるまいが、更らに、これ以上に進むのは愈々以て容易ならぬことと思ふ。故に、此の人などは、今日ウンと頑張つて勉強しなければならぬのである。幸に、近頃、道八といふ名手を附けられてゐれば、懸命の努力精進

を希望せねばならぬ。我等は、今宵、相生の宿屋を聴いて、如上の感の、一層深きを覺えたのである。身分相應の出来榮であつた事は確かであるが、その大半、イヤ七分八分はわが道八師の名絃によつて聴かれたのであつた。放送三十分間、素より、その技倆の判別を的確にする譯にはゆかぬから、多くを望むのは無理であるが、前に云ふが如く、此の人など、有望の中堅として、既に認められてゐる人の、近く數年の間に、一向取り立てゝ進歩の跡を感じしめざるは、甚だ心細い事であると思ひ、特に精進を望む次第である。

東京床語

〔四月二十七日〕

一 谷嫩軍記

熊谷陣屋の段

竹本米太夫  
竹澤 仲造

米さんといへば、東都男太夫中錚々たる人であつて、我等朝太夫全盛時代からのファンであつたが、近頃望まれて播磨

一座一座の床を勤めるやうになり減多に聴かれぬ存在になつた人。その今夜は陣屋である。陣屋は、又た吉右衛門の得意の舞臺『ナニ、藤の御局』から『うやまひ……』など満場を呻らせるもの、米さん又た大馬力であるのである。しかし、今夜は？ 全體を通じて、我等の耳には頗る……所謂喰ひ足らぬ陣屋であつて、殊に、その詞に至つて、熊谷も存外に小さく、相模も藤の方も、あんな事では……困つたものだ、と思はせられるばかりであつた。床語りに轉向後尙ほ日の淺きに拘はらず、斯うも違うものかと嗟嘆之を久うした。大體に於て落付きを缺き、言葉の受渡しも格を失なつた憾みが深かつた。が、何といつても鍛えた腕、物語りなど相應に立派だつたし、奥の彌陀六でも語られたら感服したかもしれぬが『軍次』までゝは如上の感じで了つた譯である。仲造の絃は、相變らずカケ聲がうるさいことであつた。

文樂中堅

〔四月二十九日〕

假名手本忠臣藏

一カ茶屋場

(カケ合)

由良之助 竹本 大隅太夫  
お 輕 豊竹 駒太夫  
平右衛門 豊竹 織太夫  
絃 豊 澤 廣 助  
鶴澤 清二郎  
おはやし連中

天長節晝間演藝の時間である。おはやし一しきりあつて、神ならぬほとけかゝりしとお輕の出からである。配役何れもよく嵌りて、駒太夫のおかる、言葉に梅玉のセリフ調子があつて、美聲の發揮、不思議に遊女といふ色氣もある。大隅の由良之助、立派な貫祿。極めて巧からぬ下座の獨吟が氣の毒な位。織太夫の平右衛門、やつぱりお師匠はんの引寫しだがお輕とのやりとりも、クドくなく、サラ／＼とさすがに結構、時間があれば前の口輕のくだりも語らせたかつた。小身もののかなしさは、今一ト息と思つた。お輕の『ヤア／＼／＼それはマア……』や

「おかるは始終せき上げく」は可なり高い處へ届いて喝采もの、遺憾なく我が駒太夫を發揚した。九太夫を引出して打擲する大星の長ぜりふは立派に出來た。總て、女義やお素人の達者どころが致す「入れ事」がなく、本文通りに進行したのも、我れ等得心が參つた一段であつた。絃の廣助、清二郎賢實に、克明に、御苦勞であつた。

### 大阪女義

〔五月五日〕

### 菅原傳授手習鑑

―寺子屋の段

豊竹昇之助  
豊澤力松

小供の時分東京で賣出した昇之助さんそれはよく手を叩きに行つたもの、その割りに……イヤ當夜は據ない所用あつて外出した爲め、この放送は聴き洩らしたので、何とも書きやうがない、失禮する。

### 東京女義

〔五月七日〕

### 卅三間堂棟由來

―平太郎住家の段

彈語り 竹本素女  
ツレ彈 鶴澤素一

パトロン杉山先生の歿後、却つて斯界

にノシ上つて來た感のある素女さん。因會女子部の理事長とあつて、いつの間にか押しも押されぬ東京女義の大御所になりきつて、近くは歌舞伎座の大殿堂に満員をかけさせて、萎靡振はざる東都デン界に、我が世の春を謳はれる豪勢振りを示した素女さんである。當日の演じ物は、俗にいふ「柳」の後半、母は佛間の看經に、から所謂「泥棒」のくだりであつた。さすがにドツシリとして結構な婆の氣味合もよし、例の問題の、納戸を取出す古葛籠ンナ、もさして耳際りでもなく、軽くボカシて言つて居たのもほゝゑまれた。平太郎が歸つて來て、みどり丸との驚きも口説きも充分に堪へさせられた。時間の都合なるべく、和田四郎の二度目の出、熊野權現の御符の奇瑞など飛ばして、大落しから直ちに、はや東雲へ第一のキヤリの賑やかさと、二度目のそれの陰々たる、立派にうなづかれた。大方の素義や、女義連が抜いてゐる藏人の錦の袋みぐしの件も語り進んで段切りまで三十五分間を、充分に楽しませてめでたし。

### 大阪女義

〔五月十二日〕

### 鏡山舊錦繪

―長局の段

竹本綱龍  
豊澤東重

前に聴いた事があるかも知れぬが、記憶がない。處で、新聞のラヂオ面に出てゐた寫真を見ると、殊の外美しい女性である。どうも得てして、面の好いタレにあまり上手なのは無いやうな気がするので、大して期待もかけなかつたが、サテ、愈々となつて聴くと、果して、といつては悪いが、どうも本場と言はれる大阪でも、これはまた……何とも申上げにくいまでに、おもしろくなかつた。それは巧いまづいよりは、天で何を言つてるのか、お初の如きは徹頭徹尾聴き取り難い口捌きには、弱らされてしまつた。恰かも十六七の少女が御簾内を勤めてゐるやうで……尾上の方はまア判るには判つたが、大名屋敷の奥女中、中老とかお局とかいふ品物にはなつてゐない。チト毒舌イヤ毒筆が過ぎたやうだが、實際、さういふ風にしか取れなかつたので、齒に衣着せぬ暴評御免々々である。絃の東重はシツカリしてゐる。トニカクいくらお手でも、聴く人の耳に判らなければ、何にもならず賞めたくても賞められないと思つて貰いたい。

# 人名 豊澤松太郎師を偲ぶ

(四)

川 端 柳 蛙

## 豊澤松太郎師出演年表(二)

明治十七年十一月一日ヨリ 稻荷彦六座 伊

賀越道中双六圓覺寺の段

豊竹駒太夫 沼津里の段竹本住太夫、岡崎

の段豊竹柳適太夫

同年十一月廿四日ヨリ 稻荷彦六座 附物、

ひら假名盛衰記神崎揚屋の段切

豊竹駒太夫 松右衛門住家の段豊竹柳適太

夫

十八年二月一日ヨリ 稻荷彦六座 妹背山婦

女庭訓芝六住家の段切、鱧七使者の段切

竹本組太夫 三段目背山大判事豊竹柳適太

夫、久我之助竹本源太夫、三味線(初代)豊

澤園平、妹山、定高竹本住太夫、雛鳥竹本

朝太夫、三味線(初代)豊澤新左衛門、御殿

の段切竹本住太夫

同年二年廿八日ヨリ 稻荷彦六座 義經千本

櫻かたりの段

竹本組太夫 梶原討手の段豊竹柳適太夫

十八年四月一日ヨリ 稻荷彦六座 繪本太功

記久吉陣屋の段切

竹本組太夫 杉の森の段竹本大隅太夫、尼

ヶ崎の段豊竹柳適太夫

十八年五月一日ヨリ 稻荷彦六座 五天笠須

達長者住家の段

竹本組太夫 天笠御殿の段、一ツ家の段竹

本住太夫、釋迦誕生の段豊竹柳適太夫、經

山寺の段竹本大隅太夫

十八年六月六日ヨリ 稻荷彦六座 祇園祭禮

信仰記天下茶屋の段

竹本組太夫 爪先鼠の段竹本大隅太夫

十八年七月一日ヨリ 稻荷彦六座 附物、伊

勢音頭戀寝又油屋の段切

竹本組太夫 晝夏祭浪花鑑、夜生寫朝顔日

記 此時より晝夜興行となる

十八年九月三日ヨリ 日本魂四十七騎六冊目

の切

竹本組太夫

十八年十月六日ヨリ 稻荷彦六座 双蝶々曲

輪日記八幡引念の段切

竹本組太夫 橋本の段竹本大隅太夫

十八年十一月十四日ヨリ 日蓮聖人御法海彌

三郎住家の段切、法論石の段

竹本組太夫 五太九郎の段豊竹新靱太夫、

龍の口の段竹本朝太夫、勘作住家の段中竹

本越太夫、同切豊竹柳適太夫、法論石の段

日蓮上人竹本大隅太夫、肥善坊竹本組太夫

豊澤松太郎

十九年一月二日ヨリ 稻荷彦六座 假名手本

忠臣藏勘平腹切の段切、廓文章吉田屋の

段

竹本組太夫 山科の段豊竹柳適太夫、吉田屋の段掛合、夕霧竹本朝太夫、伊左衛門竹本源太夫、喜左衛門竹本越太夫、おさき竹本袖太夫、由八竹本芳太夫、三味線豊澤松太郎

同年一月廿九日ヨリ 稻荷彦六座 新薄雪物

語園部兵衛屋敷の段切

竹本組太夫 鍛冶屋の段豊竹新靱太夫

十九年 二月一日ヨリ 稻荷六座 大江山酒

呑童子保昌屋敷の段切

竹本組太夫 渡邊綱屋敷の段豊竹柳適太夫

十九年五月八日ヨリ 稻荷彦六座 彌陀本願

三信記樋野左衛門屋敷段切

竹本大隅太夫 豊澤園平作章の新淨瑠璃二十段續き、堅田源右衛門内の段切竹本組太夫、三味線豊澤園平、鈴木重行の段豊竹新靱太夫、肉付面の段竹本越太夫、越前三國汐待の段嫁おとし谷の段竹本朝太夫 此新淨瑠璃大當り

此年の冬竹本組太夫豊澤松太郎一座九州へ行き翌年五月歸る

二十年六月一日ヨリ 稻荷彦六座 繪本太功

記大徳寺焼香の段切

竹本組太夫 中國陣家の段竹本大隅太夫、

三味線(初代)豊澤園平、杉の森の段竹本住太夫、尼ヶ崎の段豊竹柳適太夫

廿一年一月二日ヨリ 稻荷彦六座 近江源氏先陣館盛綱陣家の段切

竹本組太夫 四斗兵衛住家の段竹本越太夫

廿二年一月二日ヨリ 附物、戀飛脚大和往來

新口村の段切

竹本住太夫 櫓下太夫竹本住太夫、三味線

豊澤園平、人形吉田辰五郎と變る 飛脚屋

の段豊竹新靱太夫

廿二年一月廿七日ヨリ 稻荷彦六座 菅原傳授手習鑑寺子屋の段切

竹本組太夫 櫓下太夫本寺井安四郎、三味線

豊澤園平、人形辰五郎、道明寺の段豊竹

柳適太夫、佐田村の段竹本越太夫、松太郎

此時より太夫付となり三味線號付く

同年三月一日ヨリ 稻荷彦六座 附物、戀女

房染分手綱香掛村より坂の下

竹本組太夫 同吉田辰五郎三役早變り出遣

三吉別れの段竹本越太夫

同年四月一日ヨリ 稻荷彦六座 祇園祭禮信

仰記天下茶屋の段切

竹本組太夫

同年五月一日ヨリ 稻荷彦六座 伽羅先代萩

埴生村の段切

竹本組太夫 御殿の段豊竹柳適太夫

同年六月一日ヨリ 稻荷彦六座 附物、夏祭

浪花鑑田島町の段

竹本組太夫 釣舟三婦内の段切竹本越太夫

同年九月一日ヨリ 稻荷彦六座 極彩色娘扇

天王寺村兵助内段切

竹本組太夫大松屋の段竹本源太夫、新鞍藤

兵衛内の段竹本越太夫、天満老松町五郎右

衛門内の段豊竹新靱太夫

同年十月 稻荷彦六座 加賀見山舊錦繪又助

住家の段切

竹本組太夫 長局の段竹本大隅太夫、三味線(初代)豊澤園平

同年十二月一日ヨリ 稻荷彦六座 奥州安達

原一ツ家の段切

竹本組太夫 謙杖切腹の段竹本大隅太夫、

三味線豊澤園平

廿三年一月廿九日ヨリ 稻荷彦六座 伊賀越

道中双六岡崎の段切

竹本組太夫 櫓下太夫竹本大隅太夫、三味

線豊澤園平、人形吉田辰五郎と變る

附物、繪本太功記尼ヶ崎の段竹本大隅太夫

三味線豊澤園平

同年三月一日ヨリ 稻荷彦六座 假名手本忠

臣藏勘平住家の段切、道行

竹本組太夫（眞）中竹本朝太夫、扇ヶ谷の段豊竹新靱太夫、山科の段切竹本大隅太夫  
三味線豊澤團平

廿三年三月廿八日ヨリ 稻荷彦六座 玉藻前  
旭袂道行宇治の川邊 附物、勢州阿漕浦  
平治住家の段

田喜太夫其他、竹本組太夫 紉玉御殿の段

豊竹新靱太夫、道春館の段竹本大隅太夫、  
三味線豊澤團平師、御殿の段竹本越太夫、

道行宇治の川邊竹本田喜太夫、竹本伊達太  
夫（現土佐太夫）竹本越磨太夫、竹本朝路

太夫、三味線豊澤松太郎、ツレ豊澤仙治郎  
豊澤市造、豊澤惣太郎（今猿之助）、豊澤小

作（今仙糸）、豊澤濱幸  
同年五月一日ヨリ 稻荷彦六座 西國三十三

所花の山良辨杉由來の段  
竹本組太夫 櫓下太夫竹本組太夫、三味線

豊澤團平、人形吉田辰五郎と變る 初代豊  
澤團平作章の新淨瑠璃廿一段續き壺坂寺の

段竹本大隅太夫、三味線初代豊澤團平  
同年六月一日ヨリ 稻荷彦六座 大江山酒吞

童子綱屋敷の段切  
竹本組太夫 櫓下太夫 此時より大隅太夫

と組太夫一と芝居替りとなる 東寺の段竹  
本越太夫、保昌屋敷の段豊竹新靱太夫、松

太夫内の段朝太夫

同七月一日ヨリ 稻荷彦六座 彦山権現誓助

劍毛谷村の段

竹本組太夫 小栗栖の段竹本朝太夫  
同年九月一日ヨリ 稻荷彦六座 附物、花上

野譽石碑志波寺の段切

竹本組太夫 此時堀江大火に付休場  
同年九月十五日ヨリ 稻荷彦六座 五天笠經

山寺の段切

竹本組太夫 一ツ家の段竹本大隅太夫、三  
味線（初代）豊澤團平

廿三年十一月一日ヨリ 大阪彦六座 大阪落  
城後日日譚成田五郎兵衛館段切

竹本組太夫（初代）豊澤團平作章の新淨瑠  
璃十三段續き伏見船宿若松屋六兵衛内の段

豊竹新靱太夫、六條河原刑場の段竹本越太  
夫、兵庫津揚屋高砂樓の段竹本朝太夫、主

田村眞田大助隠家の段竹本大隅太夫、三味  
線（初代）豊澤團平 此興行大入續く

廿四年一月二日ヨリ 大阪彦六座 附物、戀  
女房染分手綱杵掛村の段切

竹本組太夫  
同年一月廿八日ヨリ 大阪彦六座 繪本太功

記尼ヶ崎の段切

竹本組太夫 中豊竹此太夫、中國水責の段

豊竹新靱太夫、紀州鷲の森の段竹本越太夫

同年三月一日ヨリ 大阪彦六座 彌陀本願三

信記聖田源左衛門内段切

竹本組太夫 同櫓下太夫竹本組太夫、三味  
線豊澤團平、太夫竹本大隅太夫と變る 道

行花の旅路（初代）豊澤團平勤らる

同年四月十五日ヨリ 大阪彦六座 忠孝義譽  
松ヶ枝一心太助内の段切

竹本組太夫（初代）豊澤團平作章新淨瑠璃  
二十六段續き、徳川家光、大久保彦左衛門

松前屋五郎兵衛、一心太助を作せしものな  
り、原井役宅五郎兵衛吟味の段竹本越太夫

淺草橋松前屋妻一心太助出逢の段豊竹新靱  
太夫、近藤東十郎屋敷原井切腹の段竹本朝

太夫、景事大久保日光社參夢の段竹本田喜  
太夫、竹本芳太夫、竹本小隅太夫、竹本朝

路太夫、竹本七々子太夫、竹本生島太夫、  
三味線シテ豊澤團平、ツキ豊澤松太郎、ツ

レ野澤吉彌（後六代目吉兵衛）、豊澤鶴助、  
豊澤小作（今仙糸）、豊澤松次郎（今力造）、

豊澤松之助  
同年五月一日ヨリ 大阪彦六座 菅原傳授手

習鑑寺子屋の段切  
竹本組太夫 道明寺の段竹本越太夫、佐田

村の段豊竹新靱太夫、配所の段竹本朝太夫

同年六月五日ヨリ 同 附物、増補八百屋獻

立八百屋の段切

竹本組太夫 前狂言伽羅先代萩殖生村の段

豊竹此太夫、土橋の段豊竹新靱太夫、御殿

の段(中)竹本七五三太夫、(切)竹本朝太夫

同年十月 同 一の谷嫩軍記熊谷陣家の段

竹本組太夫 中竹本源太夫、林住家の段竹

本越太夫 此時冬竹本組太夫、豊澤松太郎

一座東京へ行き翌年歸る

廿五年五月十五日ヨリ 同 附物、桂川連理

柵帯屋の段

竹本組太夫

同年六月十六日ヨリ 同 附物、戀娘昔八丈

城木屋の段

竹本組太夫

同年十月 同 附物、關取二代鑑秋津島内の

段切

竹本組太夫 中竹本山登太夫

同年十一月一日ヨリ 同 附物、出世太平記

松下嘉平治住家段切

竹本組太夫 中竹本十八太夫

同年十一月下旬ヨリ 同 附物、源平布引瀧

四同日音羽山の段切

竹本組太夫

明治二十六年竹本組太夫師と上京して各席へ出勤し、組太夫師歸阪後は一座の三枚目を勤めてゐた朝太夫師と東京へ止まり、一座を組織して三十有餘年、東京の名物と稱せらるゝに至つた。以後は諸賢のよく記憶せられる事であるから、これにてこの稿を終る事にしたい。

料理は關西の板前、一流處に負けぬといふ腕き、サーピス女中の中には義太夫の上手な三味線弾きが二人もゐて、宴會などに至極便利なのは、九段下組橋樺の割煮圓六である

# 護國寺の朝夕

富取芳河士

僧の後から山を下り東が白んで葉櫻の風石段を下り石段を見上げ躑躅咲き終り寺の屋根が青々と今日もさみだれ青葉に光り濡れ佛濡れて立ち乾く間もなきまだ明けゆかぬ森墓地は白みて閑古鳥

月光殿  
鳩高く飛び地上清められたる青葉  
不昧堂  
茶會の日の掃除雀子しきり親を呼び  
仲麿庵  
窓簾と此松と月も夏に入りぬ



昭和十四年四月廿六日 三日間於新橋演舞場

第三十回 東都五十義會 春季成績

查 審

星野 桔梗  
吉田 三芳  
長谷川 文久  
安藤 光樂

問 顧 藝 技

豐澤 猿之助

會 長 細川 清  
副會長 高瀬 操

大關	一六五、七五	及川	旭	前頭	一四八、〇〇	筑	波	前頭	一三六、二五	金	扇	前頭	一二八、〇〇	正	葉	鳳
關脇	一六三、五〇		呂	同	一四七、五〇	錦	司	同	一三四、七五	小	靜	同	一二七、〇〇	稻	芳	鳳
小結	一五九、〇〇		五	同	一四六、二五	柳	光	同	一三四、二五	喜	鳳	同	一二五、二五	清	葉	鳳
前頭	一五八、二五		清	同	一四四、二五	古	清	同	一三二、〇〇	素	鳳	同	一二四、五〇	龍	葉	鳳
同	一五五、〇〇		吾	同	一四二、二五	市	菊	同	一三一、〇〇	文	樂	同	一二一、〇〇	清	葉	鳳
同	一五四、〇〇		貴	同	一四一、七五	三	國	同	一三一、五〇	吾	樂	同	一一〇、二五	都	葉	鳳
同	一五三、五〇		玉	同	一四〇、〇〇	糸	樂	同	一三一、〇〇	一	樂	同	一一〇、二五	國	葉	鳳
同	一五二、五〇		龜	同	一四一、〇〇	淺	路	同	一三〇、〇〇	吾	鶴	同	一一〇、二五	都	葉	鳳
同	一五一、二五		枝	同	一三八、二五	文	盛	同	一二八、五〇	初	音	同	一〇六、五〇	富	葉	鳳
同	一四九、五〇		乃	同	一三七、七五	三	玉	同	一二八、二五	蟻	若	同	九八、五〇	網	葉	鳳
同			靜	同		誠	玉	同		若		同		正	葉	鳳

大關	一六五、二五	紅	司	前頭	一四七、五〇	鳴	門	前頭	一三五、二五	豐	伯	前頭	一二七、五〇	美	伯	美
關脇	一六三、五〇	盛	鶴	同	一四七、五〇	龜	鶴	同	一三四、五〇	喜	鶴	同	一二六、七五	二	葉	伯
小結	一五九、二五	巽	玉	同	一四五、〇〇	よ	づ	同	一三四、二五	い	美	同	一二五、五〇	紅	葉	伯
前頭	一五八、五〇	光	玉	同	一四五、〇〇	錦	松	同	一三二、七五	津	美	同	一二四、二五	駒	葉	伯
同	一五五、二五	三	司	同	一四二、五〇	吳	羽	同	一三一、七五	都	竹	同	一二二、七五	幸	葉	伯
同	一五五、〇〇	旭	司	同	一四二、五〇	緋	斗	同	一三一、二五	素	水	同	一二〇、七五	梅	葉	伯
同	一五四、〇〇	東	光	同	一四一、〇〇	林	昇	同	一三一、〇〇	や	ま	同	一一〇、二五	岩	葉	伯
同	一五二、五〇	米	光	同	一四〇、七五	美	義	同	一一三、〇〇	生	昇	同	一一〇、二五	文	葉	伯
同	一五一、五〇	高	尾	同	一三九、二五	其	芳	同	一一二、五〇	柳	汀	同	一一〇、七五	鶴	葉	伯
同	一五〇、〇〇	松	玉	同	一三七、七五	音	い	同	一一二、八、二五	かな	め	同	一一〇、七五	網	葉	伯
同	一四八、五〇	美	昇	同	一三六、五〇	百	塚	同	一一二、八、二五	可	笑	賞	一一〇、七五	喜	葉	伯

對話

新川二八樓

A、東都五十義會が三十回を記念する爲め、新橋演舞場で開催すると聞き、其企畫の大膽さに驚いたが、蓋を開けて見ると聴衆も出演者も記録破りの多數で、空前の盛況裡に目出度く幕を閉じたお手際の鮮かさには再び驚いた。

B、競演會の豪華版だれ、盛んな淨曲祭とも云へる、だが記念大會だから之でよいので、今後は矢張り質實本位に、理想から云へば、會費の範圍内でやつて貰いたいと思ふ。

A、同感だ、そこで今度の審査に對する君の感想は……。

B、經驗ほど恐いものはない、機械の様に正確な耳だよ、文句なし旨く出来るよ。

A、旨く出来るとは變な言ひ廻しだれ、何が旨く出来るといふのだ。

B、採點番附がき、中老會主催の時は最初の事でもあり多少番狂せもあつて板につか

ぬ上位演者も三四あつたやうだが、今度  
は兎に角、座るべき位置に其人を得た形  
だ、無難な審査だよ。

A、では理想的名審査と云へるかれ。  
B、無難必ずしも名審査とは言へないが、兎  
に角旭村長紅司和尙の兩長老が床柱を背  
に悠然と着座し、左右に盛鶴助役と年は

若い駐在所の且那呂聲、五口消防組頭  
巽在郷軍人分會長といふ順に五十義村の  
歴々が何の屈托もなく尻を落ちつけて座  
を占めてはいるではないか。

A、なるほど、ではズラリと其次ぎに並んで  
着席している百五十點級の有志連中が村  
會議員殿といふ顔觸れだれ。

B、何しろ、審査員が五十義村出身の元老だ  
から、村民の平素の働きから技倆は素よ  
り、米櫃の中まで知り抜いて居るのだか  
らかなはないよ。

A、全くだ、だが僕はそこに多少の物足りな  
さを感じる。出演者の全部を餘りに熟知  
するといふ事は強味ではあるが、それが  
潜在意識となつて、年功、顔、師匠の關  
係から本人の癖に至るまでの豫備智識が  
知らず／＼採點の上に影響して、良く云  
へば無難、悪く云へば平凡な結果を生む

のではないかと思ふ。

B、フン、では多少は番狂せもある、文句の  
云へる審査が希望とても云ふのかい。

A、双葉山だつてたまには負ける方が角力も  
面白いよ。前點や新舊親疎に顧慮する事  
なく採點の上に發刺たる新味を盛つて欲  
しい。僕が三日間を通じて聴いた内では  
駐在所の且那が斷然群を抜いて離れてい  
ると思ふ。正に青年横綱の面影がある。

B、餘りハツキリ云ふなよ……三十回の歴  
史を誇る大會だもの、多少の年功加俵や  
顔のきく場合のあるのは當然だ、古參者  
の既得權益だよ。そこに整然たる秩序が  
あり傳統があり總親和があると云ふもの  
だ。優勝旗授與式の時のあの人達の童心  
に返つた何の邪念もなき天真爛漫小學生  
の如き態度や笑顔を見たかい。全く美し  
い和やかな情景で何の關係なき僕等まで  
ホロリとするやうな嬉しい気分になつた  
よ。角力や拳闘とは違ふから困くなるよ  
。そう云はれると一言もない。では茲等で  
一つ競演會の主催者に注文を出したい、  
それは審査の結果を平均點ばかりでなく  
審査員別にそれ／＼發表して貰いたい。  
審査員別に對照して見ると各個性が現れ

B、て面白く、又参考にもなる。

A、養成だ、神様でないから裁く者は即ち裁かれる者で、他人の技藝を審査するといふ事は一面において自己の審査能力を批判される事になる、だから審査員は各自の見解による採点の結果を發表して出演者並に一般に問ふべき責任がある筈だ。珍らしく替成してくれたい、ては此調子で話を替へて近頃紙上でかましい岡田蝶花形氏の所謂「日本語を知れ」の問題について……。

B、

あ、あの問題か、あれは一寸簡單には云へないが、兎に角、岡田氏が蔭介石のやうに憎まれて世評の袋叩きに合つてい

るのは氣の毒だよ。僕は岡田氏を知らないから敢て代辯する譯ではないが、只單に日本語を知れ、戦術に陥つた云々程度の言葉を使つてさへそれが重大な侮辱となり、自尊心を傷けられたと感ずるほど素八淨曲界は封建的別世界で、阿謔、追従、雷岡がこれほど公然と行はれている社會も恐らく外にあるまい。特に所謂紳士素養になると一層お殿さまで周囲が誰一人だつて卒直にものを云ふものはありアしない。文章を拜見して、あれほど教養があり聰明であり、尊敬すべきだと思はれる人でも事淨曲に關する限り矢張り越前宰相式のお殿さまである事を免れない。之は平素耳にするは悉く阿謔追従、目に見るに總て叩頭百拜……。無理もないよ、だから卒直にものを云へば必ず憎

れるにきまつてゐる、斯く云ふ僕もお手討になるかも知れぬ、素人義太夫と云ふものは極端に云へば、お世辭と己惚によつて今日の隆盛が保たれてゐるやうなもので、お世辭が無くなつてほんとうの事ばかり云ふやうになれば、己惚も消滅するから素養は今の十分の一に減つてしま

らうだらう。君だつて止す組らしい、だからお世辭も必要だよ。

A、

これは手酷しい。だが岡田氏は餘り辭句の詮索にのみこだわりの過ぎる。この點、それよりもつと重要問題がさし迫つてゐるではないかと云ふ清華氏の意見が妥當だ。

B、

その通りだ。あれは岡田式の習癖だよ。

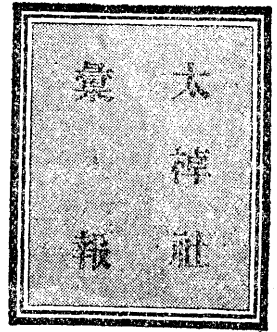
今月の淨瑠璃雜誌といふのを見ると「京大阪の旅」といふ岡田氏の一聯の連作短歌が載つているが、如何にも自由に伸び／＼と詠まれている所を見ると相當勝れた歌人ではないかと思ふ。短歌は云ふまでもなく俳句と共に世界で最も短い詩形だから、修辭といふ事は非常に大切な要素であらう。岡田氏が僅か一字の事に神經過敏で看過出来ぬ習癖は恐らく氏が長い間の歌人としての修養から來てゐるのではあるまいか。それに岡田氏の淨曲に對する智識は清華氏の言の如く未だ短歌のそれほど深く掘下げてゐられない。だから自然と、より重要ならざる方面へそれるが、一人位は重要ならざる方面を研究する人も淨曲のため必要だと思ふ。

A、なるほど判つた、だが僕は斯う思ふれ。岡田さんは自ら語られるが爲めに大變損をしてゐられるから、お止めになるが賢明ではあるまいかと。僕は岡田氏の淨曲を一度拜聴したるが意外に幼稚で拙ないのに一驚した。素人が淨曲の下手である事は決して恥づべきでなく、むしろ稚拙愛すべきで、殊更問題ではないが、岡田氏に限つて問題であると思ふ。岡田氏が淨曲に關する如何に誇々の卓説を吐露されても失禮ながら氏のお手並に對する侮りと冷笑が折角の御名論の光を遮つてどのくらい損をされているかも知れない。惜しい事だと思ふ。岡田氏は限りなく淨曲を愛してゐられるから、語るを止るといふ事は定めて辛いであらうが、斷然思ひ切られて批評と研究と指導に専念されたならば學殖は勿論、熱心でもあり良心的であるから必ず權威あるものとなり、今に東京ばかりでなく全國の淨曲界が氏の前に拜跪する時が來るかも知れぬ。

B、君こそ随分手酷しいね。だが賛成だ。兎に角良かれ悪しかれ東都淨曲界の一存在で名聲は遠く地方にまで及んでゐる。確に今日及今後の斯道興隆への推進に一つの齒車の役をなしつゝある人だ。淨曲界から引退せよなど極端な事を云ふ人もあるが以つての外で、僕等は矢張り同じく淨曲人として大に氏の御健在を祈つてこの對話を終らう。サヨナラ。

A、

サヨナラ……。 (妄言多謝)



## 野澤道之助連の祝賀會

第卅回記念東都五十義會は、四月廿六日より三日間新橋演舞場に於て開催、前號記載の通り豪華を極め、空前の盛會を以て芽出度終演したが、今回東大關に及

川旭氏、東小結に中田五口氏、西小結に井上巽氏と轡を並べて野澤道之助師連の三氏が昇進、かて、加へて藤本喜風氏が三等に入賞され、この榮冠を獲得した四氏は十日夕より淺草雷門『水月』に於て道之助師を始め關係者十數名の諸氏を招待して祝賀會を催し、及川氏の挨拶に次いで五十義會々長細川清氏の謝辭があ

▽本欄は通信又は番組御送付のもの、或は新生の會を報道するものであります。

▽開催前月に詳細を報道したものは開催後の記事を略します。

▽特種の催ほしの外前置きを略します。

——記者——

り、盛宴酣はに芽出度散會した。及川旭氏の挨拶を左に

○ 及川 旭

今夕は御忙しい處を御出下さいまして有難ふ御座ぬます。扱て、第三十回東都五十義會は前代未聞の盛況裡に終了致しましたことは誠に御同慶に堪えぬ次第であります。此の第三十回五十義會を舉行致しましたに付いて、皆さんに一言申上たいのは會長細川清氏のことでありませう會長の御家庭では一と月餘りも商賣を休業せられ、御家族總動員にて晝夜開會の

準備に御努力せられ、又會長御自身は文部省に又名士宅に先輩諸氏を訪問せられ名譽顧問に又は顧問、相談役と受諾懇請に寧日なく、其他種々準備のため殆んど寸暇もなく御努力せられし事は誠に涙ぐましいものであります。此の絶大なる努力と多額の犠牲とに依る結晶として、文部大臣旗並びに大臣盃と輝く榮冠を得ましたことは、素義會として空前の榮譽と存するのであります。茲に東都五十義會は光輝燦然として、全國幾百千なる素義會をリードして首位に列することの出来ましたのは眞に細川會長の偉大なる功績であります。此の偉大なる功績に對しては獨り吾々のみの感謝ばかりでなく、苟くも義太夫を口にするものは玄素を問はず、擧つて深甚の謝意を表して然るべしとなさるのであります。この光輝ある第三十回記念會には我道之助會よりも多數出演し、各得點を得られし事は御同慶に存するのであります。其の内藤本喜風氏は入賞せられ、井上巽氏、中田五口氏、並びに私は三役に列するの光榮を得

ましたるは、偏に道之助師の懇切なる御指導御丹精と、皆様の御支援に依る賜物と深く感謝する次第であります。聊か微意を表するため今夕御集りを願つたので

ありますが、至つて粗酒粗飯で恐入ますが、御ゆつくり召し食り下さる様、甚だ訥辯ではありませんが、簡單ながら御挨拶を申上る次第であります。

(橋、駒登太夫) 壺坂(春日、雷糸) 陣屋(薫、雷糸) 寺子屋(美幸、稻吉) 安達(可笑、團蝶) 大晏寺(春和、辰六) 帶屋(喜吉、稻吉) 合邦(古清、龍子) 鮎屋(文樂、昇之助)

## 京濱素義聯盟會春季大會

同會の第四回春季大會は、四月十九日

道之助)

より三日間毎日午後一時より川崎市福町

(二日目) 寺子屋(掛合) 松王(貴昇) 源藏(古清) 千代(東光) 戸浪(龜鶴)

演者も多數に盛況を極めた。

玄蕃、百姓(其芳) 御代、菅秀才(喜吉) 絃(雷糸) 壺坂(啓子、雷糸) 竹の間(其

(初日) 本下(掛合) 本藏(古清) 若

芳、重之助) 安達(十三三、語勇) 寺子

狹之助(其芳) 三千歳姫(龜鶴) 伴左衛

屋(雅樂、駒登太夫) 志度寺(東光、絃

(呂聲、力彌) 陣屋(吳羽、米翁) 中將姫

平) 宿屋(富穂、駒登太夫) 合邦(佐喜

(淺路、佳照) 太十(正佳、佳照) 妙心寺

子、雷糸) 沼津(美義、駒登太夫) 太十

(一鶴、駒登太夫) 鮎屋(貴昇) 佐太村(枝

樂、昇之助) 陣屋(越司、絃平)

蝶、佳照) 沼津(柳光、清調) 鳴門(壽、

駒登太夫) 橋本(操、道之助) 志度寺(乃

菊、佳照) 身賣(清、道之助) 湊町(光

玉、佳照) 太十(喜昇、昇之助) 紙治(市

菊、福彌) 新口(都昇、都太夫) 安達(巽、

大阪大日本素人淨瑠璃會の第七回競演

## 大日本素人淨瑠璃會

大演は、出演者多數の申込みにより一日日延

べをして五月廿日より四日間堀江演舞場

に賑々しく開催されたが、番組を省略し

に賑々しく開催されたが、番組を省略し

て採點の結果を次號に掲載。因に今回は 保谷紅司、佐野美昇、米澤雅樂の諸氏が東京より原田越巴、錦錦松、井上素鳳、出演された。

## 聲義會の復活

東都五十義會に次いで往年審査會の傳統を有する聲義會は、最後の會長秋本雲雀氏永眠後絶えて開催の機運に恵まれなかつたが、此頃同會の幹事たりし有志相計り、五月十六日淀橋俱樂部に於て左記番組のもとに幹事會が催ほされたが、これを機會に聲義會は、或は大々的復活す

るものではなからうかと期待されてゐる。

辨慶(綾路、綾秀) 紙治(和風、團七) 安達(里芳、勝助) 太十(冠之、勝八) 合邦(壽瓢、綾秀) 酒屋(ひばり、素女) 岸姫(叶、三勝) 以上籬抽。

## 竹本素女一座大阪へ

去月廿七日歌舞伎の大殿堂で堂々豪華な公演を催ほして滿員の好評を博した竹本素女一座は、本月大阪に進出、廿二日より三日間道頓堀中座に於て華々しく開演した。

(初日) 八陣(素國、素丸) 忠六(佳仙、雛代) 蝶八(素八、團秀) 白石(染照、清一) 辨慶(素八、團秀) 酒屋(染

登、巴佳) 近八(重子、勝八) 新口(素昇、猿玉) 寺子屋(素女) 大井川(素次素八)

(三日目) 二度目(素國、素丸) 又助(佳仙、雛代) 安達(素八、團秀) 沼津(素昇、猿玉) 陣屋(素廣、猿昇) 壺坂(佳照、清一) 紙茶(重子、勝八) 先代(染登、巴佳) 合邦(素女) 松王(素次、素八)

## 兜會役員改選

兜會は四月六日總會を開き、役員改選の結果左記諸氏がそれ〴〵その役に就任し、今回會員名簿が配布された。なほ同會は時局に鑑み春季大會は遠慮する事に決定した。

會長(鈴木和樂) 副會長(近江清華) 相談役(中澤巴、鈴木松實) 顧問(寺岡三幸、桑原美峰) 名譽顧問(福田喜撰) 幹事長(本多可笑) 幹事(中山美浪、笠松松蝶、荒木泉、根本團壽、淺原朝正、米澤春樂、北村三葵、仙臺八雲、本多加保留、中里もみぢ、加藤兜) 會計(藤田其晶、松田和可葉)

# 女子淨瑠璃研究會

第四十二回を五月十七、十八日上野

『鈴木』に開催。

(初日) 上爛屋(佳世子、佳仙) 山名

屋(越駒、紋教) 須磨の浦(重子、勝八)

御殿(若好、清二) 大文字屋(小津賀、

紋教) 太十(彌周、清三) 櫻の宮(渚の

方(素昇、猿玉) 吹玉屋(佳照、清一)

花賣、里人(若好、清二) 市人、里子(彌

周、清三)

(二日目) 竹に雀(佳世子、佳仙) 梅

由(素昇、猿玉) 陣屋(越道、仙玉) 港

町(佳照、清一) 安達(綾千代、猿玉)

「揚屋」宮城野(越駒) 信夫(重子) 宮里

(素昇) 富柴(佳照) 惣六(綾千代) 絃

(紋教)

## 淨曲無名會

五月十七日午後四時より丸の内電氣俱

樂部に開催。河野國聲氏は滿支旅行中に

て休演、星野桔梗氏が出演された。

鳴門(長平、龜造) 新口(美峰、猿之助) 合邦(どくろ、司好) 沼津(桔梗、猿三郎) 安達(操、道之助)

## 大東京嬉會の遠征

大東京嬉會は九十兩日茨木縣助川町東

海新聞社主催にかゝる日立町榮座、及び

川原子町川原子座に於ける銃後家族慰安

會に出演し、二千餘の聴衆を前に大に力

演、義太夫の神髓を發揮し會員一同大衆

の激賞を滿喫して欣然として歸京した。

(榮座) 日吉(三期) 儀作(文鏡) 太

十(鬼笑) 壺坂(専好) 質店(かなめ)

柳(花昇) 絃(蝶子、二期)

(川原子座) 本下(勘玉) 太十(専好)

酒屋(文鏡) 寺子屋(鬼笑) 先代(花昇)

帶屋(かなめ) 絃(蝶子、三期)

## 淨したしみ會

第七回を五月八日西町會館に開催。

鯨屋(華笑、勝八) 先代(圓六、文子) 寺子屋(吳羽、米翁) 太十(和勢、龜造)

## 互調會の網代行き

四月廿九日互調會連は網代温泉へ遠征、鹿島館に於て一夕の義太夫會を催座したが、鹿島館を經營されてゐる湖月氏も出演、満員の盛況であつた。なほ同行

の齋藤山生氏は都合で休演された。

安達(鹿重、佳照) 十種香(みなど、

良造) 寺子屋(二三樂、蝶子) 宿屋(湖

月、鹿重) 八陣(義雀、良造) 志度寺(乃

菊、佳照) 大切壺坂(佳照、鹿重)

## 目黒の義太夫會

四月廿九日櫻會主催で、目黒不動尊前

「角伊勢」で開催。

鯨屋(幸樂) 猪名川(一聲) 日吉(竹

聲) 酒屋(榮菊) 寺子屋(越富) 鳴門(一

樂) 陣屋(素師) 玉三(和昇) 合邦(共

樂) 松王(吾妻) 寺子屋(團壽) 忠四(浪

花) 帶屋(兜) 本下(三國) 赤垣(秀榮)

絃(仲次郎、仲三郎、榮菊、松里、正枝)

# 若手會

廿日文化俱樂部に開催。

安達(都昇、都太夫) 日吉(呂聲、力彌) 湊町(光玉) 渡海屋(子太郎、和孝) 本下(柳光) 寺子屋(巽、道之助) 酒屋(平茶、富子)

# 綾秀會

五月十一、十二、十三日西ヶ原俱樂部に於て開催。番組籠抽順。

(十一日) 辨慶(綾路) 安達(壽光) 酒屋(彌樂) 白石(綾登) 太十(八雲) 寺子屋(壽瓢)  
(十二日) 日吉(綾路) 玉三(八雲) 先代(花柳) 忠四(壽瓢) 沼津(龍司)  
(十三日) 寺子屋(綾路) 野崎(壽瓢) 蝶八(八雲) 組打(龍司) 合邦(壽光) 絃(綾秀)

# 一葉五人會生る

菅原光葉兩氏は一葉五人會を組織し、六月

月一日交正俱樂部に於て第一回を開催する事になつたが、會員は童雀、喜遊、喜光、和子の諸氏である。

# 第百回記念

# 義松會

豐澤松造・同松四郎連の義松會は今回第百回を迎へ、五月廿三日文化俱樂部に於て記念大會を開催した。

辨慶(松嘉) 本下(司若) 朝顔(松藤) 沼津(豐茂) 寺子屋(司若) 同奥(巽) 柳(玉寶) 先代(若井) 鳴門(小六) 野崎(久作、大龍) お光(小六) 久松(司若) お染(松藤) 母(扇太夫) 絃(松四郎) ツレ松子)

# 野澤彙造連網代へ

三十日網代温泉鹿島館で盛鶴、越巴、春和、松玉氏等中老會の人々の催ほしに折しも病後の保養に入浴中の神馬里芳氏も加はり、左の番組に依り頗る盛況裡に好評を博したが、續いて五月十一日彙造師の部屋打揃ふて同館へ遠征、左の通り

賑々しく催ほされた。

(二十日) 太十(里芳、彙造) 酒屋(松玉、彙造) 本下(越巴、和歌吉) 帶屋(春和、彙造) 野崎(盛鶴、彙造)

(十一日) 朝顔(鈴花) 柳(菊水) 合邦(千年) 同奥(永樂) 忠六(吾鈴) 太十(龍水) 山名屋(稻花) 鮎屋(湖月) 先代(錦司) 太十奥(丸二) 絃(彙造)

# 九阜會

豐澤鶴助師連の九阜會の第三回は、豐澤團市連、同猿喜知連合同阪東勝治身振劇入にて、五月廿三日午前十一時より三越ホールに開催。

忠六(櫓、鶴助) 辨慶(喜城、猿喜知) 彌作(ゝろは、團市) 新口(阿津滿、鶴助) 陣屋(千晴、團市)

# 二三好會生る

三華會を解散した森三好、箕村雨氏等は今回二三好會を組織して四月廿九日夕より駒形俱樂部に發會。第二回は五月廿八日菊川俱樂部に開催した。



(第一回) 柳(みさを)辨慶(村雨)  
日吉(むつみ)鈴ヶ森(靜子)十種香歌  
子(鎌三)(まち子)寺子屋(一勝)先代  
(三好)酒屋(糸鶴)絃(二三壽、三好)  
(第二回) 陣屋(一勝)安達(十三三)  
太十(むつみ)酒屋(村雨)先代(歌子)  
鳴門(みさを)柳(三好)絃(二三壽、  
三好、喜三香)

### 朝鮮文樂社主催

### 義太夫大會

天長節奉祝、日本精神宣揚の義太夫會  
が、朝鮮文藝社主催で四月廿八日夕六時  
より京城本三俱樂部に於て左記番組のも  
とに開催された。

陣屋(あづま、東廣)寺子屋(時美、  
梅若)忠六(かすみ、東廣)堀川(扇昇、  
東廣、初子)合邦(キング、梅若)又助  
(美雀、猿糸)鮎屋(貴勢、東廣)質店(水  
音、猿糸)瀧(圓八、梅若)

## 大阪文樂座五月興行

菅原傳授手習鑑||道行(櫻丸、源太夫)  
(菊屋姫、文太夫)(時世姫、竹太夫)(お  
もん、さの太夫、宮太夫)おふみ、駒若  
太夫(相瀬太夫、松島太夫)吉彌、友平  
喜代之助、八造(廣二、友三郎)(仙作、  
龍市)杖折鑑(文字太夫、吉友。呂太夫  
寛治郎)東天紅(大隅太夫、廣助)道明  
寺(津太夫、綱造)寺入(伊勢太夫、仙  
糸)首實験(古鞆太夫、重造)

三。千駒太夫、新太郎。播路太夫、吉季)  
次(鍛太夫、新左衛門。駒太夫、清二郎)  
切(駒太夫、清二郎。鍛太夫、新左衛門)  
(琴、吉藏)大井川(伊達太夫、友衛門)  
東海道膝栗毛||並木より古寺迄(彌次  
郎兵衛、相生太夫、織太夫)喜多八(相  
生太夫、織太夫)和尚(文字太夫、呂太  
夫)親父(長尾太夫、富太夫)千松(津  
磨太夫、常子太夫)道八、團六(寛治郎  
吉左、清友)團作。

### 人形役割

櫻丸、朝顔、喜多八(紋十郎)菊屋姫  
(榮三郎)時世姫、よだれくり(文二郎)  
おふみ、關助(文之助)おもん、松兵衛  
(紋司)覺壽、千代(文五郎)立田の前、  
駒澤(政龜)太郎、源藏(玉藏)兵衛、  
徳右衛門(門造)宅内、親父(玉徳)賢  
迎ひ、御臺所(紋太郎)輝國、祐仙(玉  
幸)菅相取、松王丸、彌次郎兵衛(榮三)  
戸浪、和尚(小兵吉)菅秀才(紋昇)小  
太郎(文枝)三助(多三郎)玄蕃、岩代  
(玉市)おなべ(玉男)小よし(玉枝)久  
造(玉米)千松(門次)

### 故蓑田梅司氏

### 追善義太夫會

本年七回忌に相當する蓑田梅司氏の爲  
め、蓑田梅勇氏が主催となり、竹本八重  
子連其他關係各師匠連中の後援補助のも  
とに、五月十八日午後一時より交正俱樂  
部に於て追善義太夫會が催はされた。番  
組左の通り。

手向草(十種香) 八重垣姫(梅勇) 勝  
 頼(葉光) 濡衣(喜光) 謙信(登昇) 絃  
 (八重子) 二段目(重八、八重子) 鈴ヶ森  
 (和子、巴雪) 太十(司、八重子) 日吉喜  
 光、八重子) 又助(童雀、八重子) 鯨屋  
 (千歳、才造) 鎌三(松壽、八重子) 柳勝  
 美、巴雪) 合邦(喜遊、巴雪) 安達(秀  
 樂、猿清) 忠六(一、巴雪) 同奥(梅聲、  
 巴雪) 蝶八(八千代、八重子) 太十(さ  
 つき、一。光秀、喜遊。十次郎、久吉、

## かに・天ぷら

## 御料理

深川區白河町一ノ六

(區役所通り)

# 二葉

錦 さと

和子。操、勝美。初菊、梅聲) 絃(巴雪)  
 寺子屋前(葉光) 中(登昇) 切(梅勇)  
 絃(八重子) 本下(本藏、登昇。三千歳  
 姫、松壽。伴左衛門、葉光) 絃(八重子)  
 なほ梅司氏の友人であつた竹本麗太夫が  
 巴雪の絃で特別出演した。

## 竹本播志保追善會

竹本播志保師は永々病氣中の處、遂に  
 五月九日逝去。手塚てつか氏を始め生前  
 交誼のあつた師匠連が計つて、六月十一  
 日交正俱樂部で追善義太夫會を催ほする  
 事となつた。

## 胃腸に

# ミラカチ

## ◆ 籠花 ◆ 束花 ◆ 輪花 ◆

御送迎・御佛事・御見  
 舞は何卒弊店へ御用命  
 願上候  
 新花・廉價・迅速は弊店  
 の特色

# 花

下谷稻荷町(青バス車庫前)

サカタ・フロリスト

電話(下谷)六一八一番

本誌 後援 名譽 會員

(イロハ順)

(東京之部)

廣瀬 いろは氏  
吉川 浪 補氏  
阿部 一氏  
北島 北斗氏  
中澤 巴氏  
安藤 どころ氏  
吉田 登盛氏  
小川 都山氏  
安藤 都昇氏  
保々 長平氏  
栗原 千鶴氏  
岸 竹史氏

神馬 里芳氏  
岡本 柳光氏  
本木 大熊氏  
鈴木 和樂氏  
小林 和舟氏  
本多 可笑氏  
飛石 かなめ氏  
加藤 兜氏  
高橋 可遊氏  
西田 可松氏  
大用 大嘉津氏  
田口 辰壽氏  
疋田 大龍氏

井上 巽氏  
小林 太二八氏  
根本 團壽氏  
野田 高尾氏  
杉山 橘氏  
坂倉 素遊氏  
浮谷 祖樂氏  
川口 子太郎氏  
小埜 長とろ氏  
宮本 武藏氏  
萩原 うつぼ氏  
乃村 乃菊氏  
中野 吳羽氏  
山下 彌生氏  
國井 やまと氏

菅原 葉光氏  
松林 福笑氏  
鈴木 兒雀氏  
水戸部 壽氏  
原田 越巴氏  
河野 國聲氏  
松岡 語松氏  
田中 湖月氏  
湯淺 光玉氏  
岡崎 田六氏  
寶藏寺 天昇氏  
大築 葵氏  
松本 朝章氏  
及川 旭氏  
柳 有明氏

中川 愛氷氏  
 寺岡 三幸氏  
 木村 さかえ氏  
 齋藤 山生氏  
 平井 榮氏  
 細川 清氏  
 金田 金鳳氏  
 井田 菊泉氏  
 錦 錦松氏  
 淺田 奇聲氏  
 歸山 歸世花氏  
 川奈部 銀司氏  
 猪谷 銀水氏  
 岩木 義雀氏  
 吉良 蟻若氏

岩田 末成氏  
 高瀬 操氏  
 吉田 美地句氏  
 横井 三由氏  
 野口 みなと氏  
 岡田 源氏  
 北村 三葵氏  
 池田 三國氏  
 吉田 三芳氏  
 高橋 宮古氏  
 鈴木 松寶氏  
 菊池 秋月氏  
 平井 壽樂氏  
 山田 壽瓢氏  
 田口 司重氏

濱口 秋華氏  
 武笠 宏亮氏  
 高品 一重氏  
 平山 平茶氏  
 桑原 美峰氏  
 佐野 美昇氏  
 松岡 茂里雄氏  
 白井 清華氏  
 近江 清華氏  
 湯原 清司氏  
 沼井 盛鶴氏  
 時田 靜史氏  
 (地方之部)  
 米國 平野一昇氏  
 同武 榮玉氏

名譽會員

同 杉山 陶岳氏  
 同 兼廣 廣玉氏  
 同 西本 西紫氏  
 大垣 吉岡 十八公氏  
 下關 保良 鈴鳳氏  
 横濱 和田 和朝氏  
 同 霜島 錦司氏  
 八幡 古賀 大彌氏  
 高橋 宮古氏  
 杉山 橋氏  
 岸 竹史氏  
 岡本 柳光氏  
 湯淺 柳光氏  
 菅原 葉光氏  
 平山 平茶氏  
 八幡 古賀 大彌氏  
 横濱 霜島 錦司氏  
 本誌後援名譽會員を御快諾賜り難有奉深謝候  
 太 棧 社

# 當座帳

▽河野國聲氏 五月八日出立滿支旅行中。

▽平井昌子氏 病氣加療中。

▽田中煙亭氏 永々病氣加療中の處、此頃漸く恢方に向ふ。

▽竹本米翁 目下湯河原に靜養中。

▽豐澤仙十郎 本所區綠町一丁目八番番地へ轉居。

▽鶴澤絃平 聖路加病院へ入院。

## 寄贈新刊

▼話術▼ましろ▼文樂▼淨瑠璃時報▼藝  
▼獺祭▼オール演藝▼露▼可樂▼淨曲新  
報▼淨曲研究▼大日本淨瑠璃雜誌▼京城  
のラヂオ▼土▼寶塚月報

## 編輯後記

★今春の大會は素玄ともに豪華に豪華を重ね、何んといふ目覺ましいことでありましたでせう。今秋の大會が待たるゝ次第であります。

★素義界では近江清華氏が『乃未將軍』

を初め最近では『昭和軍神聚西住』等、西住大尉奮戦の新作を發表せられ、玄人の方ではこれまた新義座の『眞木薫皇國礎』が好評を博し、次いで竹本織太夫の『恩讐の彼方へ』の放送と、陸續新作の發表される事は「大衆に義太夫を普及するには、判かり好い新作から云々」と言はれた近江清華氏の名言が實現して、今や我が淨瑠璃は大衆に喚びかけて來たのでありますまいか。今まで義太夫嫌ひの若い人々が、新作淨瑠璃を聞いて「これなら判る」と言つた風にそろ／＼義太夫に興味を持つやうになり、一年生から二年生とだん／＼奥深く進んで、初めて古曲の味を知る事になるといふ、清華氏説は誠に結構なものであります。

★頁の都合で本號には廣告を休載致しましたが、弊社は十週年記念事業として『東都素義大鑑』を近々發刊致したく存じますが、三年目とか五年目に發行するといふ類とは違ひました、今後幾年目に斯うした大鑑が編纂されますかわかりませんが、此際お一人も多く組入れたいと存じます。本大鑑に依つて永久に皆様の御風姿が偲ばれ、四六倍版上質アート装幀の高雅は、皆様の机上に一層の光彩を添へる事と存じます。何卒御援助御申込みを願上ます。

芳河士

### 第四百號

(行發日五廿回一月毎)

料告廣	定	一部	金三十錢	郵稅三錢
	價	六月分	金一圓八十錢	郵稅共
料特	普	一年分	金三圓	郵稅共
	別	一頁	金貳拾圓	
		一頁	金參拾圓	

▼記念寫眞掲載料は一頁金拾五圓申受ます  
▼誌代は總て前金御拂込の事  
▼なる可く振替に御送金の事  
▼郵券代用は一割増但三錢切手の事

昭和十四年五月廿三日印刷納本  
昭和十四年五月廿五日發行  
東京市小石川區音羽二丁目四

編輯兼 發行人 富取 壽鹿

東京市牛込區早稻田町五八  
印刷人 栗原 榮松

東京市牛込區早稻田町五八  
印刷所 栗原印刷所

電話牛込一四五番

東京市小石川區音羽二丁目四

發行所 太棹社

振替東京三一七八五番

昭和十四年五月廿三日印刷  
昭和十四年五月廿五日發行

(每月一回廿五日發行)

太  
棹  
(第百四號)

定價  
金參拾錢

高 級

# 舟和ホテル



淺草區雷門一丁目五十五番地

(相生無盡社會隣)

電話淺草(84)一六六五・五五六二番